

秋田名物♪ 大館曲げわっぱ

市民リポーター 折田 誠子 (清水町)

秋田音頭にも謳われ、古くから親しまれている大館曲げわっぱ。国の伝統的工芸品にも指定され、私たち市民の誇りとするものなのですが、その実態の多くは、意外と知られていないのではないのでしょうか。そう思った私は、今回大館曲物曲輪工業を訪ねてみました。

昔は使い捨てだった 曲げわっぱ

最初に「ワッパ」という言葉について調べてみました。すると、なんと語源はアイヌ語であるらしく、意外な発見になりました。国語辞典でも調べたのですが、これでは見当らなかったのかもしれませんがありませんね。

曲げわっぱの起源は各家庭で自家製造されていたお弁当箱なのだそうです。戦前は使い捨ての物だったと聞いてびっくり。現在の曲げわっぱの華々しいイメージと比較すると「信じられない！」の一言。昔の資源の豊富さをあらためて感じます。



初めて知ることがたくさん

お弁当箱として作られていた曲げわっぱについて取材しているうちに、面白いお話が聞けました。曲げわっぱの中には、海で働く漁師さんのお弁当箱として使用されているものもあり、実物を見せていただいたんです。そのお弁当箱とは、三食分はゆうに入りそうなほど大きなもの。ちょうどおひつを一回り大きくしたぐらいでしょう。か。「大海原で働くには、一食分の持参では不足なのだろうな」と思っていたら、お弁当箱が大きいのは理由がもう一つあったん

です。このお弁当箱、実は漁師さんが海で遭難した際に浮き袋がわりにもなってくれるのだそう。これを抱いていけば、海に放り出されても三十分は浮かんではいられるとのこと。これを聞いて、驚くべき大きさにも思わず納得。

作ってみると 意外に難しいのです

現在は、お弁当箱はもちろん、コースター、コーヒーカップ、お盆など、様々な曲げわっぱが作られています。私は、今回曲げわっぱのお盆作りのお手伝いをさせていただいたので、その製造工程を皆さんに紹介したいと思います。

曲げわっぱの材料となるのはもちろん秋田杉。それも樹齢二百年前後のものだそう。ただし、ここで残念な発見が……。現在使用している秋田杉材は大館産のものではないとのこと。これには驚きました。

曲げわっぱ用の秋田杉は、現在大館では伐採していません。専ら比内町や田代町産のものが使用されているそうなのです。それに、昔使用していた天然杉材に比べる

と、現在使用している造林杉材は木目が粗く、あまり質が良くないのだとも伺いました。

- ①製材 ②木取り：杉を適度な大きさに切る作業。
- ③部材取り：杉板の長さ、厚さ、大きさを整える作業。ここですでにたいの形が決まります。
- ④煮沸：固い杉板を、湯の中で十分ぐらゐ煮て軟らかくします。
- ⑤曲げ加工：ここで私の出番！ お盆の枠になる細い杉板を輪の形に曲げるといいう作業のお手伝いをしました。見ていると簡単そうなのですが、実際にやってみると結構な力が必要なので、なかなか思うような形に曲がってくれません。意外に難しいんです。
- ⑥乾燥 ⑦本加工 ⑧桜皮とじ：輪の形に曲げた杉板の端を、桜の樹皮で縫い合わせます。
- ⑨底入れ：ここでもまたまたお手伝い。さっき曲げた枠に底を入れる作業です。これもなかなか思うようにいかず、職人さんに笑われちゃいました。
- ⑩仕上げ塗装：化学塗料や漆を塗る作業です。以上のような作業を経てやっと製品になります。

伝統継承と企業経営

現代はプラスチック製品が市場に出回っています。「木の良さ」が見直されてきた最近まで、曲げわっぱにとっては苦しい時代が続いたそうです。伝統工芸「曲げわっぱ作り」も一つの製造業であり、



曲げ加工は難しいんです

業績をあげなければ経営が成り立たないのです。「伝統工芸に指定されているからといって、なにがしかの保護を受けているわけでもないですから、販路の拡大に努めたり、商品としての曲げわっぱに新しい工夫を加えたりと、伝統の継承とともに一企業の生き残りをかけて、しなければならぬことがたくさんあるんです」。これを聞いて、華やかなイメージを持つ曲げわっぱの、影の部分を見聞したような気がしました。以前は海外輸出もしていたそうですが、現在は円高の影響で採算が合わず、輸出は見合わせているとのこと。リポーターを通して「伝統工芸」という響きはいけれど、それを担っている企業は、重い責任も負っているのだなあ」と感じました。伝統を守ることとは、木目のように、細かいこと一つ一つの積み重ねが大切なのだと思います。